日本聖公会
ウイリアムス神学館ニュース
2022年
第112号
The Bishop Williams Theological Seminary NEWS
日本聖公会京都教区
発行・編集人：黒田 裕
〒602-8011
京都市上京区桜鶴円町380
TEL：075-431-5406
FAX：075-431-5445
williams@muc.biglobe.ne.jp

ご挨拶

同志社大学 三輪 地塩

はじめまして。三輪地塩と申します。２０２２年４月から「日本キリスト教史」を担当させて頂くことになりました。喜びと緊張をもって務めさせて頂いております。

立教大学大学院キリスト教学研究科を修了した後、同大学文学部などで兼任講師を務め、２０２１年から同志社大学神学部の教員として着任致しました。専門は、広義には日本キリスト教史ですが、修士課程では日本プロテスタント史のとりわけ葬儀についての歴史学的・実践神学的アプローチで研究を行いました。また博士課程では幕末明治期の津和野キリシタンの殉教史について、宗教史学的・歴史学的見地から研究してまいりました。「日本」「歴史」「宗教学」が関心の基盤であり、現在もプロテスタント史・キリシタン史の両面に関心を持って励んでおります。

牧師としては「日本キリスト教会」という旧日本基督教会系の教派に属し、東京中会所属の無任所教師という立場で主日礼拝説教奉仕をしております。「日本キリスト教会神学校」という教派神学校（埼玉県川越市・４年間）で神学教育を受け、現在は同神学校の歴史神学部門講師も仰せつかっております。小さな規模の神学校ですが、在学中は同級生に恵まれ、毎日あれやこれやと神学議論に花を咲かせたものです。牧師としての最初の赴任地は、北海道勇払郡（道南地区）にある酪農村の教会でした。倉本聰のドラマ『北の国から』を彷彿とさせる絵にかいたような農村でしたが、自立した信仰者たちに恵まれ、駆け出しの６年間を支えられながら過ごしました。次の赴任地は埼玉県さいたま市の比較的規模の大きな教会で、ここに12年間おりました。農村教会と大教会という、極端に規模の異なる教会での牧会は、大変に幸いな経験となりました。教会という共同体の有機的繋がりは、キリストをかしらとして仰ぐことなくして、真の教会形成はありません。そのような、至極当たり前ながら日々の牧会活動の中で忘れがちなことを、二つの任地で学ばせて頂けたのは、かけがえのない恵みとなりました。

コロナ禍も３年目を迎え、様々な規制が解除されつつあります。小職の小さな経験を活かしつつ、教役者の備えをする学生たちと学び合いたいと願っております。一生懸命励みます。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

（みわ ちしお 本館教授
日本キリスト教史）

道を伝えて

The Anglican Way という聖公会論に関する本がある。Way とは道、方法などの意味を持つが、著者は Way を"イエスに従うキリスト者の生き方"としている。世界には多様な伝統があり、その生き方は一つではない。このような文脈において、著者はこの世界に生きるキリスト者の生き方をコップまたはワイングラスに喩える。世界には多様なワインがあるが、それを味わうのに適したグラス／杯がある。ワインとはイエスがもたらした福音であり、グラス／杯とはこの世界の多様なキリスト者の生き方であり、聖公会という教派はグラス／杯のその一つであるという。

本館では教派を超えて多様な背景を持つ先生たちが自ら大切にしている福音を携え、多様な背景を持つ神学生、聴講生たちとともにそれを分かち合う。ワイン（福音）が持つ豊かな香り、味をじっくり味わい、各々の特徴を知り、知識を深めて視野を広げていく。そしていつの日か成熟したソムリエのようにワイン（福音）が持つ豊かさ、素晴らしさを明快に伝えると同時に、それらを絶えず新鮮で最良な形で保ち、最高の状態で差し出すことができるように教える者と学ぶ者がともに研鑽の日々を過ごしている。

（司祭 林 和広 はやしかずひろ
本館教授 聖公会論 礼拝学Ⅱ）

ダビデ谷昌二主教を偲んで

司祭 バルナバ 大野 清夫

２月９日、谷主教様が逝去されました。また一人、大きな柱を失ってしまい深い寂寥を覚えます。若い死であったと思います。

谷先生とは不思議な関係でした。あまり話をしたことがなかったのです。寡黙な方でした。私の神学生時代に食事を作って下さっていた小仲さんもこのようなことを語っています。「葬儀で奈良まで二人で一緒に行ったのよ。でも谷先生ったらその間、一言も話さないのよ。」その谷先生が私に真剣に話しかけて下さった時がありました。健康を害した時でした。「ここに座れ」と言われ体のあちこちを触れられました。そして「気や、気や、気が滞っとる。」と言われたのです。谷先生の情熱と愛を感じました。嬉しくなって「嵯峨野大覚寺の不動明王の背後に面白いものがありますね。」と語るといきなり「炎や、炎や、それは炎なんや。」と語られたことを鮮烈に思い出します。ことのほか仏教に造詣が深い先生でした。当時谷先生の司牧されていた復活教会は復活寺、谷先生は谷ボンと神学生から呼ばれていました。私が復活寺に行った時も、谷先生は座禅を組んでおられたようでした。お話をされるのは奥様の利子さん。先生はそばで黙って座っておられました。そのような谷先生でしたが、若い頃はやんちゃなようでした。

すき焼きパーティー事件です。八木基督教会で若者が夜中にどんちゃん騒ぎをして屋根の上にまで登った話を学生時代、八代崇先生から何回も聞きました。八代先生はまだ若かったし桃山の勤務もあったことから「こらっ、おまえら、二度と教会に来るなっ！」と怒ってしまったとのこと。怒られた若者たちの中心に谷先生がおられたことを知ったのは最近のことです。「烈火のごとき怒りに、ガタガタと震えがとまらない我々でした。」「翌日主日の礼拝で、感情を爆発させたことについて、正直に告白、懺悔の説教をお聞きして胸が熱くなりました。」と谷先生は『北関東教区時報』（１９９０年）に書かれています。そして「人は出会いによって造られる。八代先生との出会いによって今の私の人生があることを思います。苦しい時つらい時、いつも先生の温かい笑顔を思い出しつつ、奉仕の道を歩ませて頂いています。」と続きます。谷先生のお人柄がしのばれる文章です。谷先生も誠実な方でした。自らをひけらかすことなく、寡黙に聖職の道を歩み続けられた暖かなお姿は、いつまでも私たちを励まし、導かれます。谷先生、ありがとうございます。

（本館理事 市川聖マリア教会牧師）

同窓会通信

「同窓会通信」のバトンが越山司祭から渡され、訥々と神学校時代に思いを寄せております。とは言うものの、そんな昔のことにも思えず、手探りでその時々の質感を触れることもできるのです。なぜなら、当時の日々の歩み一つ一つが強烈であったからです。祈り・学び・交わりと言う、その新しさに触れた後のかさぶたが、ある意味心地よいものとして蘇ってきます。

２０００年卒業の北海道教区の松井と申します。主の平和が皆さんと共に。これまで五つの教会の牧師と、管理牧師を一つ。協働で関わった教会が二つ、施設を三つ関わってきました。特に、施設での子供たちとの関りは、私の召命の一つでもあり、楽しく関わらせて頂いております。

神学校時代を思い返すと、一日一日が必死だったことが思い出されます。毎日のレポート、他者との祈り・交わり、土日の実習は毎度エルガーの「威風堂々」を聞いてからでないと腰が上がりませんでした。もちろん、一度は辞める思いも持ちました。そんな折、友と喫茶店に行ったり、先輩とコンプリンを続けたり、小さくとも深い恵みの数々が私を立たせてくれていたのです。

現場に出て数年後、病も得た後、数人の信徒さんに「ずっと、祈り続けていましたよ」と告げられたこと。共に卒業した友と司祭按手に与った後、共にひざまずき祈り、泣き合ったこと。生かされていたのです。ありがとう神さま。

（司祭 グレゴリー 松井 新世
苫小牧聖ルカ教会牧師）

新入生紹介

ウイリアムス神学館での日々

大阪教区神学生
1年　ヴェロニカ　薦田　久美子

主の平和がありますように。

この原稿を書いている時点で、ウイリアムス神学館に入学して約1か月が経ちます。

4月には荘厳な入学礼拝の中、皆さまのお祈りのうちに神学館に迎え入れていただき、心から感謝申し上げます。

日常生活は、皆さんが親切に指導してくださるので何とか送れていますが、神学館の、ありとあらゆる礼拝形式には戸惑い、てんてこ舞いしていて、自分の勉強不足を猛省しています。

また、聖書内容試験も戸惑い（いえ、もはや憤り！）の1つです。

創世記から始まって、毎週1コマ使ってそれぞれの書の内容のテストがあるのですが、選択式だったのは1回目の創世記だけ。予告もなく出エジプト記は選択肢が消え、ついに先日の民数記では記述問題が登場しました。そのテスト直前に担当教授に愚痴を言うと、「聖書開きたくなくなるよねー。」と同情的だったのに。

こんな風に未だに落ち着かない状態で、目の前の御所にもなかなか行けませんが、京都は緑がとても多く、また、大木が多いところが大好きで、それらを見ながら癒されています。

このように、落ち着くには当分かかりそうですが、毎日祈りながら少しずつ歩んでゆきたいと思っています。

出版物のご案内

初夏を思わせる陽光のもと5月25日、待望のウイリアムス神学館叢書第5巻、岩城聰教授著、『今さら聞けない!? キリスト教―聖公会の歴史と教理編』が刊行されました。西原廉太中部教区主教・立教大学総長による「推薦の言葉」にあるように本書の大きな特徴は「歴史編」と「教理編」の二部構成になっていることです。これにより読者は煩雑になりがちな全体像の整理が可能となるでしょう。また、「アングリカン・コミュニオン」というアイデンティティは19世紀に明確となるのですが、このことに大きな役割を果たしたアメリカ聖公会の誕生について一節が割かれています。さらに東アジアはもちろんのこと南アジア、オセアニア、アフリカといった世界に広がるアングリカン・コミュニオンの動きをはじめ最新の動向にも幅広く目配りがされており資料も豊富です。例えば、「海外宣教会の日本宣教と教区の成立」（238頁）では、どの宣教団体がどの教区の設立に関与したかを俯瞰で見ることができます。ある事項を手際よく確認するためのマニュアル的な使い方もできそうです。まだまだ他にも特徴を挙げられますが（どうぞみなさんも探してみてください）、「ありそうでなかった」が満載のこの第5巻、ぜひ一度手にお取りください。ご注文は近くの書店かキリスト教書店までどうぞ（直接本館に取りに来られる方はその限りではありません）。

【教文館　税込価格：1、980円】

（編集部）

チャペルのお引越し

本年5月末をもって教区センタービルが次なる事業者に引き渡しとなることに伴って、4月7日（木）にチャペルの引越し作業を行ないました。ここでの礼拝としては最後となる「昼の祈り」を終え、昼食をとった後、まずは仮の移転先となるニコルス館コモンルームの片付けと清掃です。その後聖卓や聖具、リタニーテーブル等の移動と清掃を行ないました。備品の全てが取り出されてがらんとしたチャペルに少しの寂しさと長年ここでささげられた数多の祈りや賛美、嘆きと喜びに思いを馳せ、主への感謝とともに仮チャペルへと向かいました。備品類の設置が終わると、北側背面にはかつてうず高く積まれていた荷により隠れていた十字架が現れました。こうしてみるとこれはこれで立派なチャペルです。ここでまたしばらくこの小さなコミュニティの霊性が育まれていくことでしょう。（編集部）

教区センターチャペルでの最後の礼拝

備品搬出後のチャペル

仮チャペル

コモンルームの片付け